

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

鏡の中の花 求那跋摩伝再考

著者	宣 方
雑誌名	東アジア仏教学術論集
号	2
ページ	265-274
発行年	2014-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00007371/

宣方氏の発表論文に対するコメント

石 吉 岩*

(韓国 金剛大学校)

一

宣方先生（以下論者）の論考は、五世紀中盤に中国に来て訳経家として活動した求那跋摩三蔵の伝記を再検討したものです。論者が後記で明らかにしているように、漢文文献の中、ジャワ仏教関連資料を検討する研究の一環として試みたものです。討論者は華嚴を専攻する者であり、ジャワ仏教、特にボロブドゥール寺院に対して大きな関心をもってはいますが、実際のところ、ジャワ仏教、特に七世紀以前の時代の状況に対しては十分な理解を持っておりません。よって論者の見解を補完したり、他の意見を提示して観点を成熟させたりという点では不足するという点をあらかじめご理解いただきたく存じます。

以下、私が理解した論旨を簡略に整理した後、幾つかの質問を通して理解の助けとしたいと思います。

二

私が理解した論旨は次の通りです。

現存するジャワ仏教関連の漢文文献資料の中、求那跋摩伝は、初期ジャワ仏教の状況を知ることができる、数少ない資料の中の一つであり、同時に大変多くの情報を含んでいる独特な資料であると言えます。特に求那跋摩伝の記録をそのまま受容するならば、初期のジャワ仏教の性格に及ぼした求那跋摩の影響は大変重要であるという点を指摘しています。そして論者はこの点に注目し、初期ジャワ仏教の性格を究明するために、求那跋摩の屬賓国での所属部派および学風、そして中国における活動内容を検討し

*석길암 (ソク・ギリアム)。金剛大学校仏教文化研究所 HK 教授。

たものと考えられます。

この検討を通して論者は、罽賓国が説一切有部の中心地であったため、当然、求那跋摩もやはり有部僧であろうという一般論に対して反論を提起します。反論に用いられた根拠は次の三点です。

第一に、求那跋摩は法蔵部『四分律』系統の律蔵を主に翻訳し、祇洹寺では『法華』と『十地』とを講義し、慧義の要請により『菩薩善戒』を刊行した。ここから見て求那跋摩は、法蔵部の僧侶である可能性が高く、同時に瑜伽行派の思想に明かったものと推定されること。

第二に、始興靈鷲山寺にいた時、宝月殿の北側の壁に直接、羅雲像と定光儒童布髪の像とを描いた。この儒童布髪の本生譚は罽賓国の範圍に属するガンダーラの西方で発生し、最も多く流行した故事であり、法蔵部と密接な関係を持つ。また、この本生譚は大衆部と上座部の分別説系統における思想の大乘化の進展という側面で、極めて重要なものであると指摘しています。

第三に、求那跋摩の遺偈を通して現れる彼の禅法は、ガンダーラ地域の普遍的な禅修の特徴に符合するものであり、説一切有部および瑜伽行派に共通するものである。ただ求那跋摩の学風から見る時、議論を重視する説一切有部よりは禅修を偏重していた瑜伽師に符合し、同時に呪術を重視する法蔵部の特徴を持っていると指摘します。

これらの根拠から論者は、求那跋摩の影響のもとに形成される初期ジャワ仏教は、大衆仏教レベルの呪術の流行、ガンダーラ地域で主流であった禅法の伝来、西北インドで新たに登場した秘密瑜伽行が伝わったものである可能性が高いと推定しています。また現存するボロブドゥール寺院遺跡に現れる様々な要素が、求那跋摩の伝法時期に、既に存在していた可能性を推論しています。

三

以上、論者の論旨は、多様な要素を細心に考慮した結果として提示されたものであるため、反論の余地は事実上、別に存在しないと思われます。ただ、大きく二つの疑問点を提示し、私の不足を埋めようと思います。

第一に、論者の論旨を受容するならば、東南アジア地域において大乘

仏教の伝来は相当程度、早い時期にさかのぼることができます。ところで周知のごとく、七世紀末にこの地域を訪れた義浄の『南海寄帰内法伝』には、この地域の仏教が大部分、小乗であると記録されています (T54, p.205b)。一般論という前提のもとで言えば、大乘仏教を中心として始まった仏教が小乗中心に急変するというのは、それほど簡単なことではないように思います。むしろ、論旨の一部分にあるように、求那跋摩が法蔵部所属の僧侶だったであろうという推定にしたがい、法蔵部系統の仏教が伝わった可能性に重点を置くほうが、より妥当なのではありませんまいか。あるいは論者の意見の如く、小乗への転換が見られる端緒があるいは存在するのでしょうか。一方では、インドネシア・スラウェシ (Sulawesi) から出土した4世紀の作品と推定される青銅の錠光仏 (燃燈仏) 像が報告されていますが、ここから或いは求那跋摩以前に、すでに周辺地域に本生譚の故事が流通していたという可能性はないのでしょうか。この点に対する論者の意見を求めます。

第二に、第一の問題と関連しますが、求那跋摩の伝記に『華嚴經』、菩薩地、禪觀修習、呪文を唱えること (持咒)、本生譚の故事などの要素が登場するという点に着目して、ボロブドゥール寺院に現れる仏教文化の要素が、求那跋摩の到来していたジャワ仏教初期に、すでに存在していた可能性を推論しています。しかし、祇洹寺で法華と十地とを開講したことや、慧義の要請により『菩薩善戒經』を刊行したことなどは始興でのことです。この事例は求那跋摩の学問的な性向の一端を示すものではありませんが、中国の仏教徒たちの要請に応ずるためであったという可能性も大きいと考えられるため、禪觀修習と呪文を唱えること (持咒)、そして本生譚の故事の他の事例を初期ジャワ仏教に適用することは、それほど適切ではないと考えられます。この点について論者は、どのようにお考えになるのか、伺ってみたい存じます。

最後になりますが、優れた原稿を読む機会をくださった論者に再度感謝申し上げます。

(翻訳担当：佐藤 厚)